



学校便り「尚徳」 11月号

第494号

鳥取大学附属小学校

平成25年11月18日

<http://www.fuzoku.tottori-u.ac.jp/~fusho/>

題字「尚徳」は、住川英明教授（地域学部）



文字を書く

副校長 北村 順子

文書を作るときは、パソコン。誰かに何かを伝えたいときは、電話やメール。最近、日常生活の中で文字を書く機会がとみに減ってきた感があります。学生時代にはしっかりあった右手の中指のペンだこも、ころなしに小さくなった気がします。書けるはずの漢字がすぐに頭に浮かんでこないのはその弊害でしょうか。

先日、小さな幸せを感じる出来事がありました。素敵な手紙をいただいたのです。同窓会の出欠を伝える手紙だったのですが、和紙の便せんに毛筆で丁寧に書かれていました。読んでいるときに、きっと心を込めて書いてくださったのだらうと、胸が温くなる思いがしました。ご高齢の方なのですが、書き慣れたしっかりとした筆跡です。「字は体を表す」という諺どおり、几帳面なその方を彷彿とさせるような文字でした。「文字を書く」ことによって心が伝わることをあらためて実感した瞬間でした。そして、自分自身も「文字を書く」ことを大切にしていかなければならないと思いを新たにしました。

学級担任をしていたころ、「連絡帳や学習ノートの字を丁寧に書こう」というめあてを子どもたちに提示していました。どの民族でも文字は何かを伝えるために先人が長い年月をかけて考え出したものです。連絡帳は保護者の方に、学習ノートは後で振り返る自分のために、と伝える人つまり読む人を意識して、丁寧に書くことが大切だと話しました。上手、下手ではなく丁寧に。不思議なもので、文字は本当にそのときの学習意欲を如実に表します。学習に落ち着いて取り組んでいるときは、文字を丁寧に書くことができます。何か気になることがあったり、集

中できなかつたりするときは、乱雑な文字になってしまいます。連絡帳や学習ノートを見れば、担任は子どもたちの学習状況が大体つかめるのです。言い換えれば、「文字を丁寧に書く」ことが学習意欲を高めることにつながるようになるのです。下敷きをして、姿勢を正して、文字を丁寧に書く、当たり前のことを当たり前にすることをおろそかにしてはいけません。家で宿題をするときも同じことが言えます。

現在4年生の書写の時間の担当をしています。学ぶことはまねぶこと。鉛筆を使って書く硬筆習字のときは、まずお手本の字をコピーするつもりで、自分の字の癖を出さないようにするよう声をかけています。総じて自分の癖が出やすいのはひらがなです。1年生のときに一字一字しっかりと基本の字形を押さえているのですが、日々書き慣れてくると、丸文字になったり、「とめ」や「はね」がよい加減になったりしてきます。お手本をすぐ横に置きながらゆっくりゆっくり書くように指導していきます。日本人が長い年月をかけて洗練してきた文字の素晴らしさを次の世代に引き継ぐのも、私たち大人に課せられた大きな責務かもしれません。

高学年玄関前の今月の詩のコーナーに美しい文字で書かれた「まっかな秋」の詩が掲示されています。パソコンの文字に見慣れている目には、毛筆の文字が柔らかく、そして温かく見えます。手書きの文字には活字にない魅力があります。最近書店の棚で広い売り場面積を占めている各種の「美文字」練習帳。「文字を書く」ことが見直されてきた証拠です。子どもに言う前に、自分自身「丁寧な文字を書く」、「一筆箋を使って短くてもいいから手書きで伝える」を目標に「書く」ことを楽しみたいと考えています。

【研究発表大会】



10月26日（土）に本校の研究発表大会を開催しました。前日に大雨警報が出て天候が心配な中、当日を迎えました。県

内外から約300名の参加者で大会は盛会となりました。子どもたちとたくさんの先生方をお迎えできたことに感謝しながら、授業を公開しました。

各教室では、子どもたちが思考力を働かせながら、友だちとかわり、本校だからこそできる学び合いを実践しました。多くの参加者から児童の姿に感動したという感想をいただきました。これは、家庭教育の力が根底にあるものと改めて保護者のみなさまにも感謝したいと思

います。附属小学校だからこそできる研究をさらにすすめていき、子どもたちの成長を支えていきたいと考えています。

準備から片付けに至るまでお世話になった懇話会役員のみなさま、変則的な日程にもかかわらず、臨機応変に対応していただいた保護者のみなさま、ありがとうございました。参加者のみなさまや保護者の方々の思いを、今後の附属小学校の研究にしっかりつなげていきたいと思っています。

